



正徳四

廿四子終

里冬選

いそせうのつらさかたき奥羽の
とやうな所は、さうの遠くは、
り今の凍荒と沖込の首途に於て
のさうな所は、さうの遠くは、
節の安宅乃國後の説きも、
多し、つらさかたき奥羽の
の節を、さうと、さうと、
此節と、さうの遠くは、

より遊士十二人作歌の由を撰ぐる
のくさうのゆゑに信しむる
らぬ

甲午五月日 不世舎人誌之



安宅懐旧



先達

涼菟

郭之や女をよるぬ人の如

常陸坊

乙甫

えまの裏の目貫や梅りし

兼房

曾北

諫言小今所むてぬ夏終り形

亀井

之仲

ふく草のふや亀井いりあつらふ

斤田

舎仙

詠ふりも斤たりふつふまに終

伊勢三良

里冬

天照形新りう南左のころとふと

まゝのつゆ

貞吉

一とふそ後に客村やむのふ

原八重

朴人

とふあふ救難とるふくし原八重

徳井三良

宇中

ふきひゆふと嘯のをふ何と思ふ

就馬尾

一才

蟬の色くへふぬわりのとれつら

剛力

越前 伯免

や冒の 草鞋にうす車穴麻のふり

お入の家具おゆ物い赤く成 朴人
杉のぬぬてしとさるぬ神
午と川人おのたふとろ 冬
悟らふなるとる旅一たふし 菟
忙於と性の中をを記あふと 冬
ぬるおらるおふとく火登る 甫
伎師の住ぬ小言の月まてと 北
我くらたふの神とてなぐ 人

さる馬龜刻取入西の形 仙
名おかしとさるかると 冬
雲といは海川答よるたのま続 菟
還本柄や馬の答の事 冬
かひらた拂子とさる白雲のえ 甫
大吟一とと寝るいさうく 水
陸とあひとこれる燥拂 人
さるおさるのぬてしとて 仙

掃いとらおふくことさくらみ
 秋のあり終るを祖父のついで
 柴鴉れまゝと月の花念は
 まゆよの塚を侍従塚も
 悪かゝる^元翁なれを狂やつれ
 片にのひ帯 凡の存書
 何孫喰ま馬ふ茶なと祝くら
 名ふより神とて細工も久是
 冬 仙 人 北 南 才 菟

孫のつく尾をん勢いま 猶荷板
 志つるをん板をぬのりてあ
 ぬふ山は侍のまを投くハ
 ぬふの今春なるといふ草のよ
 奇ふはさあ 詠活ハ 雛子
 冬 人 山 南 才 菟

其二

宇中

森而み中のたぢい〜
 是のいふあり〜海松の一房 里冬
 白鼻と〜時〜急は〜ふれを〜つて 之伸
 けり〜きれの破さ〜これ也 貞吾
 亥月の十五夜るれ〜みゆれ〜 涼菟
 芙蓉のむの笑み〜けり 貞紫

ぢん〜も〜根あけのぬ衣 冬
 是のいふ〜に〜霞の海〜 中
 ぬのとみ〜ぬえの〜み〜は〜金ぬ 吾
 婢〜う〜強〜と〜さ〜せ〜な〜さ〜む 伸
 枝〜ゆ〜あり〜し〜と〜筋〜と〜な〜ん〜と 紫
 松の世若れ〜い〜い〜い〜世や 菟
 考の〜い〜所〜よ〜い〜 星 中
 ねぢい〜い〜は〜月〜の〜満〜人〜や〜ら 冬

可のみと際いぬるまふ人 (道)
 越洲ののこし 麴の章
 いふおも知をさるいとんされま
 ねね 一 ぬ中の魚といんをぬ
 宮^前ち乃柳さきのみはのこし
 とこやうう又^又昔のむくひ
 冬 中 吾 件 案 字

さこ

貞吾

ぬしきたすのみのぬの枕あを
 耀ひのの〜やをいひるも 里冬
 とんと積るはをなけおして 曾北
 いつとも茶うわりまじり飲は 涼菟
 ぬぬのえふのたにぬぬい又 宇中
 菊けいさうの掃除一 峯 吾

むふよわ降ゆしんま舞の
珍汰さねわらやまの侍
大所かゝ炭のいゝをゆいな
善哉舞とさげなとさ
およんで甘酒小隠居をさの勢
おのほりぬもと持つてさ
よの中に悟りさせぬらあし
志うしとさるいかり合の元
冬 北 冬 吾 中 菟 小 冬

半下の月貴殿小たゆしとや
んぞよくかゝるに柳の葉
舞小独めん人なゝわ清自と
ぬを袖儘小さるおん
ささいぬ林此はなほ踏まよふ
二人おのたよりけおま
れうふりてねむ小豆り
うつらや合歡のよ味
冬 吾 中 菟 北 冬 吾 中

鳥形赤肌をぬくのいなまゆら
 地を赤くする青の化物
 水になく屋の栂川のえとわさ
 箱一把つつかまきこく
 標きの百走産路くらしく
 月の清好とあけの殿松
 雪のふゆを波せしとまけ
 今入るのそなとけし松葉
 中 菟 北 冬 吾 中 菟

あれちよりの道具と研抄り形
 後をよめしとおかていけ
 室の又なほしとて砂の上
 あ宅へうらのまじり地産葉
 けしひの光るをふとらひらし
 飛てあきおれ箱まの執が
 中 菟 北 冬 吾 中 菟

ふの百

貝業

さみし様の月、白鳥から底まで
 系、ハワカ、くさ、并行小、南、冬
 鳥、堀の、か、ま、が、一、何、り、あ、乙、南
 修、つ、い、て、に、む、と、ま、物、了、涼、菟
 ぬ、糸、の、ま、る、も、持、れ、ほ、く、ま、也、冬
 ほ、ま、に、よ、ほ、ま、ま、の、ま、から、紫

う、い、ろ、か、と、思、ひ、こ、い、ま、に、こ、れ、月、菟
 ま、い、ら、ほ、ま、ま、い、ん、ぬ、ま、る、ま、方、南
 赤、土、の、ま、い、ん、ぬ、ま、れ、て、あ、ら、う、南
 ま、ら、れ、ま、ま、ま、い、な、ら、ふ、速、速、冬
 み、ま、ら、い、悟、気、の、影、ふ、火、を、焼、て、南
 恨、ハ、神、ま、と、い、れ、知、の、い、な、菟
 け、い、ハ、ね、ま、ま、ま、は、者、獲、ま、ぬ、冬
 純、子、ま、ま、め、れ、圓、の、ま、ら、ま、紫

ちの海にまはると水にのり
 くる後つれて八洲のはる
 りとて海にまはると水にのり
 印の竹の節ふあつた
 一羽の鶯のやと車
 小使のまきことうげの佐
 稲子つよはよむるとはを志ん
 個ぬらめて目のうち月
 莞 南 曾北 舍仙 冬 伯免 糸 莞

ちかちかといふとふらぬ
 くらとていふとてはぬ
 海にまはると水にのり
 尻小のまはると水にのり
 扶持うたなぬ刀にぬ
 ぬらとて海にまはると水にのり
 今秋から粘指をけとる
 仲は月と神は西
 南 莞 糸 冬 伯 仙 北 南

東に何れを袋せきりて負
 ふのふれいし市のいさる
 海にふらちれと形は岸の和田
 ありふり博てまはる川舟
 あつふふふふふふふふふふ
 るとゆふと
 さいち
 かしら
 北 仙 伯 冬 仙 尊

其の仕 之伸

六月の何れの日と終て古き
 花の飾の暮ふたもまじく 里冬
 くらくやし律法と氣に働きて 朴人
 傘のうゝ 悠なる中 今仙
 与るのなふくくとは地月の如 涼菟
 つかふあつふ不滅なること 貞吉

志をこころにまよふる角のとり人守一
は公家の果のいほ葉儘よわ
なる夜やまよひにらりぬあさころ
りりとほゆるーとまきあけ
まのこころと終るれ連やこひ舞
馬出てふのまのぬりこね
今あごとあ神禱念の生さくれ
幸ひにぬてち二年よ
イ 吾 菟 心 人 冬 仲

をぬふるや信ふの葉なまわ
天かへ降も国よふく
加減よも苗代もに月れ乾
あつし耐ふらにこころま
そのうち研もなとさそを落し山
とまよーとこころなつあこころ
ほろこころふたぢりつてむす
花のまよふるこころまよ
仲 菟 冬 仙 菟 人 吾 仲

こういふしぬをいふれにまはり
胸骨もくして老への恋
おんまふ井系飯とまうる
まふしけふ指とくさう
まふしけふ日なれ月の
まふしけふくまの田の方
曲よ歌奴も先の事なれ
ひさしとまふしけふ

昔 人 菟 仲 吾 人 吾

掛とのと法必莫作と清くは
垣たよーらふい音のしら
押もとなしひらけのそを教
日とまふしけふかふんを
まふしけふのほしれ信が弟
隣の梅もくさうと日まう

菟 人 吾 仲 吾 人 吾

伯免

山みされのまやめくた一人前
 ふと一足靴は棠小似今ぬ 里冬
 追きくく鳥の尻ゆる羊腸 一才
 あせいたの白ふげのあや 之仲
 けりてはまきたた敷の月まきと 合仙
 車あつたなと名のわりあき 涼菟

ちかふるに中いものかよふんぬ 貞吾
 田く入屋の伊直とよが 伯
 とふ実の余をた飯を押しけて 冬
 せせふふふふのえあぢ也 才
 き傍の黒くふくくしては 仲
 だつた隣のふふはるの松尾 仙
 大目と首の髪かいたあさ 菟
 余はのふふふふふふ 吾

旅人そとへは月夜はかき
 移らるるも秋にひかたき
 鯨多し折つてむの涙の
 彼岸まのこころにたれ
 山に新きわらふ去の音
 石ぬきまの山のか
 指からなみひかたき
 ちれいせいのあつたの
 冬 伯 吾 菟 仙 仲 伯 冬 伊

情な〜温はあつた〜
 こころがわらむ母の白髪
 食言て法目小かきむに
 毛〜く〜く〜と〜
 爰に又約か〜と〜
 然〜あ〜あ〜の〜
 位あれて〜
 皆あ〜く〜た〜
 冬 伯 吾 菟 仙 仲 伊 冬

草へくまを成る後りき
 ありふると木の枝
 負ゆる仙小物さうひひく
 日暮りて花をよこし
 忽然ふかきつきの陰
 独活とりつと
 冬 仙 菟 牙
 仲 冬 仙 菟 牙

廿七

涼菟

秋の味に遊る者あり
 給のなるつと扇をひ
 赤土の往還筋とわきにんて
 初めを何人待てきと
 林つと階子ついでに
 枝ともわくに黄い
 中 中
 之 仲

けしきまらぬふらんのよの柏子 今仙
 仰きよ小藤のふかきとを 朴人
 ちやせいの太田おふ遠海りね 一才
 合急しゆし門お系をむむ 自善
 りろまを戻して今祈むささ 乙甫
 さい足り小いなるの金華 貝紫
 ねんそろうおてあれとこ徳の崎 執事
 結つらふねと酒の名人 菟

奥小宮のさかきとさきとる桐子 冬
 魁^{たけ}歩のゆりをつむようけ 伯
 川あててたすの松とやまの松を 北
 果き能研り浪人の秋 中
 格式の通うおふ小い月此羊 仲
 らへい蒸の穴隔もやら 仙
 かしよち内は異眼の糸川のを 人
 おくしよしきる松友の七いふ 才

二
 五
 昔 吾 菊 冬 荒 北 伯 仲
 何れは時を待て又
 なみ草の解目塚とてひる
 今更の影をいとしらぬ水降
 我ららたもてはふおもろく

仙 人 吾 甫 索 冬 莞
 十 佐 子 具 男 夫 子 可 也 夫 之 月
 世 中 之 所 何 也 也 也 也 也
 山 之 互 也 也 也 也 也 也
 世 中 之 所 何 也 也 也 也 也
 世 中 之 所 何 也 也 也 也 也
 世 中 之 所 何 也 也 也 也 也

庭掃みくろれ花を掃出
 鬼をいらい今も昔と
 目のみ溜り灸をきられ
 孫むと時れくくると
 彼れと^手てせぬを押理す
 ふいぬ年と橋のゆも
 隠れて月を任事小打流え
 葉いさしとと蘭い 来る

小 伯 仲 人 吾 南
 仙 人 吾 南

智あふ方をかしのたて四甲雀
 若ふとつ小影つま〜
 花ふと隣のおきやなとち
 あいさし〜
 もろふ苗代

苑 繁 仲 中

五月雨

五月雨の未忘山や降るるし
と甫
きると今さるや久そあさ月雨
朴人
け池のいそ然何とさつさあ久
一子
ゆみされのふや中く
笑河やの
里冬
五月雨のきれい
あふとれふきり
夕市
茶袋て然たさ人さ月雨
糸人

ふらふらのけさるを誰の涙よか笑吐
々あふふまきしの橋やふ月匂可徳
ふ日匂のさきふけさるあれ全只北枝
さみきれの影や雀のとさる日獅吹
しほれちとぬよるあさる日史梅
あさるイセ松尾二林
かへるイセ松尾雨 芦本
のみいれイセ松尾の仕也あらハ菊

餘興

眠る人ふみーかお仕年月ねが 宇中
夕さのあれねまきいんと遠ー柳子
のりし車いふりま措の猿涼イセ万里
死ぬるまきいれ遠れなうけサ京之白
一書と二書と料の喜田の形イセ曾北
衣さるぬ越前世ふ棕の樂あり 伯免

こゝに翁を小松吹と云ふ

こと余小松吹なりて

小松吹すべしと云ふ翁を此翁と云ふ

天神同信小松吹

下る翁を夏明也と云ふ神の松

里冬亭

わさとなぬ翁の志きわや竹板

之川亭 翁出り

翁かぬを橋と云ふ翁と云ふ

春元奥村

うとまき翁ふらうと云ふ翁板

多その神社なりし義仲翁附
の宝物あまの翁と云ふ翁の翁
ありん小彼實盡の甲の翁の
翁ありしと云ふ

今松山乃翁の翁れやさ日翁

乃翁翁

翁の翁と云ふ翁を翁と云ふ

初つるの月乃とやほつを早敷メセ 某反
くふの甲紙細メ上より傳せらる日 披長
甲の角を扇をやちの庭 舎仙
十きこふ年のよひ日念々入 貞吾
たふれせゆ日ふいこぬるほ日ふい
甲の用り立扇を日選尋な日あり 全
ほ日ふいふいふいふいふいふい 一イ
あ日ふいふいふいふいふいふい 里冬

需みミクニのふいふいふいふいふい 播東
ふ日よふいふいふいふいふいふい 昨裏
麻のふいふいふいふいふいふい 全
ころひる日麻の日敷りあ日てふ扇日は 琴之
よ日ふいふいふいふいふいふい 静水
いふいふいふいふいふいふい 徳甫
竹條原の池日なる
只一日ふいふいふいふいふい 伯免

阿のやのし海宮なす一このふをとも 曾北
 人のさしとまほふらやを逢竹 し甫
 くらうらう飛や雲のあかりみ 貞吾
 子ぬらうおま羽織あふさひ 春元
 移り終てを兵帳や智竹船 只三
 船お舟川上の故と余はり船 永井堂
 落る音梅のあやめさうま言 勇山
 子親いりふ古日の介の月 不村

新嘉也青山折の匂ふらと 楚又
 思うは狩一々金や日かゝのさ 芦笛
 夕のののよまきて遠てをとやち 貞吾
 風の吹来とく入迎ると日暮い事 貝紫
 氣起て花川とくすすみおの形 之仲
 肩ぬちの係のあつたのあつた 金沢 江芦
 仲凡被の涼菟 まろちりて
 夏つへ柳小庭をとりせきり 和屋山 玄扇

年の子や五頃及の枝よりの
知衣山 獲守
るもき原曆小言いみの地を
カキハ 布湖
梅の雨名いやさうそ飽りり
越前 不

菴子の旅之舞しきうりきた

旅之在ゆそいろも志めり日月雨 云扇
日月あや降とせめて思ふさか 友清
ほしあふくよあまに国雨 造本
夕の雨のをやふふの空りら 邑方

宿よくと雨ふ枝も粟乃ふ 文口
ねとよとととくつり水鶴留 里冬
二人長く椽小何やらゆふ涼 ワカ 佳木
裸なり阿難迦葉とあるむら ワカ 凡虎
く靴ハる刀小く我あれ毎ちほき ワカ 東怒
六七騎冷麦とくむかやと我 全
志し壁下くつり椽や夕夕涼 ワカ 可伸
すしこの鳥羽の羽やれそ 尔弓

おれさうて久よ青梅の枝ありし 之川
短歌のいふ終福むくし合歡のふ 簾吹
娘 一の波のなとわく神 山視
日暮日ハ花かききる合のふ 正奇
之のふむろきくニや森の隙 乃露
ふやをたむらふとて花むく 夕市
山の井乃物瓶釣瓶小昔や及木立 人
それと斗まの底むくしき次 可夕

思の名をほく娘ありゆされふ 朴人
湖涼一川一山一のふとと 宇中

涼菟小いさまうれて涼菟
宇中亭子宇中亭子

代とみ名のわかぬつあり竹の色 曾北

何ふ

蟬の色せさみこれの余波や 里冬
あつまうし新茶と契宿るれ 宇中

怪^軽落子別てい竹芥子坊主^全仙
 飛り、ゆゑにまゝをいれお次^之仲
 又さうして徳のよきやねの障^乙甫
 翌日の夜いらくお照そり管^貝察
 かさねとあそげ扇の要の木^外人
 ちくちくおふんいあひくても^貞吾
 かくまひぬき櫛の白ひあひ^春元
 又送るや櫛のふし日の光^不計

又をくらや月みかゝぬまう
 けかていすもなれおのあき雨^一才
 されおああ終つてははらふあや^知夕
 こころ目をとみおふアをそく^文口
 箕笠とつりし紙張の障の声^山視
 風葉お終つてははらふあや^乃秀
 笠とつりし金波の影おあ^亦弓
 皆輝と成るをくら人馬の徳^正身

みのまよふ化てさへ田く入時 且藤吹
まの隈とんま^送らうのま^りは 三川

留ふ

今と月くつまぬ余はや一む所 涼菟
つこくくの果とや所と誰と意 曾北

洛陽二条 平野屋依子清

加陽金澤 三ヶ屋まゐり清

板行

昭和十四年八月二十日寫校了
原本 松平文庫 俊定



